

シンポジウム I: それぞれの主張、臨床検査学教育の可能性を探る

5. 短大での臨床検査技師教育 —本物の臨床検査技師を育てるために—

伊藤 昭 三*

[キーワード] 新渡戸稲造、日本臨床検査医学会、少子高齢化、受験生数の減少、3年制

はじめに

今日、日本の医療は皆保険で国民が安心して医療にかかれるために、診断、治療だけでなく予防にも力を入れ、また医療費の無駄を省くために診療の細分化や高度先進医療が取り入れられてきた。その中で各臨床検査技師養成校は、日々臨床検査技師が何ができるのか、現場で何を必要としているのかを臨床現場と連携を取りながら教育していると思われる。

新渡戸文化短期大学臨床検査学科は臨床検査学を体系的に教育した最初の学校である。現在多くの臨床検査技師養成校は4年制の大学教育になっているが、その中で3年制の短期大学での教育は如何にあるべきか、今回のテーマである「本物の臨床検査技師を育てるために」はどのようにしたら良いのかを、臨床検査学教育の発祥の地としての本学・本学科のルーツに遡りながら話を進め、本学臨床検査学科の使命と今おかれている現状、求められる「本物の臨床検査技師」を育てるために、何をしてきたのか、また今後何をしなければならぬかを述べたい。

I. 新渡戸文化短期大学のルーツは 北海道大学にあり

本学(旧 女子経済専門学校)の初代校長は新渡戸稲造で国際連盟事務局次長など国際的に活躍され、著書として英文による「武士道」を著し、世界で読まれている。新渡戸稲造は札幌農学校(現北海道大学)の第2期生で、後に札幌農学校で教鞭を執られていた。また本学創立者 森本厚吉は新渡戸稲造を慕って札幌農学校に入学し、同じく後に教鞭を執られていた。本学創立時に森本厚吉理事長が新渡戸稲造を校長として招聘して、本学の教育の礎を築いた。

II. 本学臨床検査学科のルーツは 日本臨床検査医学会にあり

臨床病理懇談会(現 日本臨床検査医学会)は、第二次大戦後検査を医師の片手間でするものではなく、アメリカの近代化された病院の中で検査装置を中央化し、専門家が行った検査でないと信用できないとのことで発足した。臨床病理懇談会の主な発起人は橋本寛敏(聖路加国際病院

*新渡戸文化短期大学臨床検査学科 m_sitou@nitobebunka.ac.jp

長)、坂口厚蔵(国立東京第一病院院長、現 国立医療研究センター病院)、加藤勝治(東京医科大学病院院長)、緒方富雄(東京大学医学部教授)で、初代会長は橋本寛敏であり、その他小酒井望(順天堂大学医学部教授)、石井暢(昭和大学医学部教授)などがおられ、当時医学界で活躍されていた蒼々たる方々であった。

その発足時に臨床検査技術員養成の問題が議論され、「見よう見まねの見習い検査技師じゃ使いものにならない、臨床検査全般にわたる基礎ならびに実習教育を受けた技術員が必要で正規の教育をしなければならない」という結論(小酒井望、石井暢の言葉)に達したとのことである。当時、橋本寛敏会長は本東京文化学園(現新渡戸文化学園)の理事長でもあったため、本学に臨床検査技術養成の白羽の矢が立った。このことから本学の臨床検査技師養成の設立は臨床現場の医師、当時の臨床検査医学会からの要請によることが特徴となる。

臨地実習先として国立東京第一病院(現 国立医療研究センター病院)が提供され、その後聖路加国際病院、東京大学病院などの病院により支援して頂いた。講義においても当時一流の医学や医療の指導者が行っていた。初めての養成校であるためカリキュラムや臨地実習などあらゆることにパイオニアという意識があり、教育の水準も厳しく、学生、臨地実習先や学校当局にも、将来の日本の形を切り開いていくという思いで、非常に熱心に勉強・運営されていた。そのため衛生検査技師法の中で学校教育については、検査内容を広くして教育している本学をカリキュラムのモデル校にして施行した。

現在、日本臨床検査同学院の一級、二級臨床検査士認定試験は1954年から始め、当時は全科目であった。試験は本学で教えている範囲のものを知っていれば合格するというレベルで、本学が当時標準になり、現在の検査技師の知識・技術の原型をモデル的に作ったのが本学といわれている。

III. 本学臨床検査学科の使命

短期大学の個性・特色は、地域の身近な高等教育機関として、短期間で大学としての教養教育やそれを基礎とした専門教育を提供する点にある。故小酒井望博士は「患者のための検査を行う人材養成(当時は研究室、基礎教室で行っていた)、現場重視(米国方式採用、緊張感が重要)、一流の臨地実習先、指導者による教育水準は世の中に出しても、これから本人が努力してくれば大丈夫というところで採点をした。当時も日本の一流の医師達は、それなりに実習、教育を引き受けているものの責任として、納得のいくところまで、技術・知識を身につけてもらうということは教員の責任という気持ちでおこなっていた。」と述べており、現在も教職員一同この使命を忘れずに教育に当たっている。

IV. 今おかれている臨床検査室の現状と教育に求められるもの

本学が技師養成を始めてから66年間の経過を振り返っている。その中で医学・医療が進歩し、検査室では中央化・自動化、検査センターのブランチ化などの検査体制が変化してきた。検査にあたっては臨床検査項目・件数の増加、新たな検査分析の導入(遺伝子検査や質量分析計など)、国際標準に合わせた検査の精度保証、今後医療にも導入されるAIなど新たな教育が必要になってきた。また少子高齢化、医療費の膨張による影響など一検査技師、一検査室、一病院ではどうにも対処できない大きな流れがある。このような状況でどのようにしたら3年制の教育で臨床検査技師として社会に初めて一歩あゆむ教育ができるか考えなければならない。

V. 今おかれている3年制養成校の状況

現在大学全入時代の18歳人口は13年後に19万人が減少する。その人数は1,000人未満の大学408校の総定員数と同じくらいになり、閉校する大学、短期大学、専門学校が現われる計算になる。この少子化の中で将来、数ある医療職

の中で臨床検査技師に就きたい受験生はどのくらいいるのだろうか。

その状況で全国の臨床検査技師養成校数は2018(平成30)年現在89校ある。関東圏内に限っていえば30校(大学19、短期大学2、専門学校9)あり、臨床検査学関係の大学院教育を行っている大学・大学院も増えている。また出口の就職については、戦後の団塊世代が後期高齢者に突入する7年後の2025(平成37)年の高齢化の進展に伴い、医療・介護費等が増大する中で臨床検査技師の適正人数はどのくらいなのか、また保健・医療・介護の分野で生き残るためには何が必要なのか考えなければならない。

VI. 本学は求められる「本物の臨床検査技師」を育てるために、何をしてきたのか

本学の教育は、医療人の前に人格形成と考えている。人格形成とは「思いやり、公共心、倫理観、基礎的なマナー、身の周りのことを自分でしっかりとやる」とし実践している。実践内容は下記の通りである。

1) 授業開始前に1分間の沈黙

これは新渡戸稲造博士が国際連盟事務局次長のときに、言葉、習慣、立場が異なる国際会議でお互いを寛い心で受け入れるために提唱したものである。本学は、これを受け継ぎ実施している。

2) 年間行事による社会人基礎力育成(主にコミュニケーション力)

経済産業省が提言している「社会人基礎力」の育成は、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」とし、基礎学力・専門知識を活かす力<3つの能力/12の能力要素>を述べている。3つの能力とは前に踏み出す力(アクション)、考え抜く力(シンキング)、チームで働く力(チームワーク)であり、特にコミュニケーション力は一人では身につかない、出来ない、座学の講義でも難しく、行動の中でのみ身につくと考える。

<主な内容>

オリエンテーションキャンプ(1年)、トレー

ニングキャンプ(2年)、ゼミナール活動(1、2年)、臨地実習(5ヵ月間、3年)、新入生ウェルカムパーティ(全学)、スポーツ大会(全学)、クリスマスパーティ(全学)

3) 「臨床検査技師としての基礎力」の充実

臨床検査技師の基礎力としては、免許取得は当たり前であるが、現場に出てどのような力が必要か試行錯誤をしている状態である。その中で主な内容は下記の通りである。

<主な行事>

患者接遇トレーニング(演習、2年)、医療コミュニケーション(講演、1年)、実習病院見学(1年)、新渡戸検定(本学科独自の認定、2年)、5ヵ月間の臨地実習(3年)、実習現場の技師長、卒業生による講話(2、3年)

<自己啓発の奨励>

毒物劇物取扱責任者取得(1年)

統計検定(3級)合格(1、2年)

第2種ME技術実力検定合格(2年)

特定化学物質及び四アルキル鉛等作業主任者取得(2年)

心電図検定(3級)合格(2、3年)

遺伝子分析科学認定士(初級)取得(3年)

東京都臨床検査技師会研修会参加(全学年)

<本学内にある臨床検査学研究所による既卒者のフォローアップ>

認定試験実技支援、再就職の技術支援など

VII. 今後何をしなければならないか

本物の臨床検査技師を育てるためには、常に教育法の完成はないので、教員の教育力・研究力の向上、学生の置かれている環境を認識しながら前に進むしかないと思われる。これで良いと思ったところで学校としての魅力は減少する。そのためには、本学の真の財産である実習病院、臨床現場からの非常勤講師、社会で活躍している卒業生、一緒に学生を教育している本学の教職員により有機的に繋がるが必要と考える。

常に変わることを恐れず、試行錯誤して前に進むことを常にしなければならない。